



# 『詳説日本史』『高校日本史』 の執筆にあたって

設楽 博己

**筆**者が執筆を担当したのは、『詳説日本史』（日探705）の第1章「日本文化のあけぼの」の「1文化の始まり」と「2農耕社会の成立」、『高校日本史』（日探706）の第1章「日本文化のあけぼの」の「1日本文化の始まり」と「2農耕の開始」であり、時代は旧石器時代から弥生時代におよぶ。旧版（『詳説日本史 改訂版』（日B309）、『高校日本史 改訂版』（日B314））からの変更の要点は両書ともほぼ同じなので、ここでは『詳説日本史』（日探705）にもとづいて記載する。

まず、旧石器時代であるが、内容に関わる変更はほとんどおこなっていない。ただ、「日本列島と日本人」の項で、旧版ではまず地質の記述があってそのあとに人類の記述があるが、それを逆にして、どのような人々によって旧石器文化が構成されて、その人々がどのような環境で暮らしていたのかという筋立てにした。また、「旧石器人の生活」の項では、環状のキャンプサイト、「落とし穴」、調理の場とされる「集石」など、遺構の面から生活の実相に触れられるようにした。

つづく縄文時代では、「縄文文化の成立」の項で、縄文文化の始まりを土器の出現を指標にして、旧版の約1万3000年前から約1万6000年前に、縄文文化の終わりすなわち弥生時代の始まりは約2500年前から約2800～2500年前に改めた。これは、AMS法（加速器質量分析法）という新しい<sup>14</sup>C（炭素14）年代測定の進展と年輪年代法によって<sup>14</sup>C年代を実年代に較正する技術と研究の進展にもとづく。幅をもたせているのは、北部九州地方と東日本の弥生文化の始まりの時期にズレがあるからである。

それに続いて、約1万1700年前以降に縄文文化が急速に発展することを記した。これも<sup>14</sup>C年代測定の成果であるが、この頃、世界的な再寒冷期であるヤンガードリアスが終了して、名実ともに氷河期が幕を閉じる。そしてそれに続く温暖化によって定住生活が促進されて貝塚も登場するなど、だれもが縄文時代とみなす範囲の目安になるので重要である〔谷口2019〕。

「縄文人の生活と信仰」の項で、旧版には「一部にコメ・ムギ・アワ・ヒエなどの栽培も始まっていた可能性が指摘されているが、本格的な農耕の段階には達していなかった」との記載がある。きわめて適切な表記なのだが、現在その可能性が乏し

くなったので割愛した。その根拠はレプリカ調査の進展と<sup>14</sup>C年代測定である。

レプリカ調査とは、土器の表面にある植物の種子などの圧痕にシリコンを注入して型取りして圧痕のレプリカを作成し、それを走査型電子顕微鏡で観察して植物の種を同定する作業である。この方法による調査の全国的な進展によって、これまで縄文時代前期の可能性が説かれていたイネなどの穀物の出現は、縄文時代晩期最終末をさかのぼらないことが確認されている〔設楽2022〕。

また、縄文時代後期とされるイネの炭化種実の<sup>14</sup>C年代測定をおこなったところ古代以降という結果が出された例がある一方で、年代測定によって縄文時代晩期最終末をさかのぼった炭化穀物の事例は、雑穀を含めて今のところない〔國木田ほか2021〕。

このように、縄文文化は採集・狩猟を基礎にする文化であったが、単純なものではなかった点も近年発掘調査の結果をふまえて論じられるようになってきた。たとえば、環状列石や環状集落の中心が墓地になっている状況から祖先祭祀が芽生えていたのではないかという研究がある〔谷口2017〕。さらに縄文時代後期以降、東日本の各地で検出されている環状盛土遺構など、協業による大規模遺構の存在から、縄文時代が停滞的で平板な社会ではなくて、とくにその後半期に儀礼によって社会を統合するような複雑な社会に移行していったことを少し強調した。

トチノキの種実に特化したアク抜きのための水さらし用の木組遺構が、後期以降の東日本で顕著になるのも、近年各地の発掘調査で確認されるようになった。これもまた採集狩猟社会における技術の高度化を示すものであり、今回は注(教科書p.9注⑦)に回したが、紙幅に余裕があれば、写真などを示してもっと大きく扱ってもよかったと思う。やはり紙幅の都合から、旧版のコラム「年輪年代法と炭素14年代法」を割愛せざるをえなかったのも残念だった。

弥生時代は、その開始年代と縄文時代との境界をめぐって記述を改めた。どのように改めたのか、その根拠とともに示しておこう。

もっとも大きな変更は、水稻耕作の始まりを前8世紀頃にしたことである。これは前述の縄文時代と同様に、<sup>14</sup>C年代測定とその校正結果にもとづく。国立歴史民俗博物館が提起した弥生時代の開始年代は、当初様々な批判があり現在も論争は続いているが、おおむね紀元前10～前8世紀で学界の評価はかたまりつつある。

また、縄文時代の6期区分に合わせて、弥生時代早・前・中・後期の4期区分を示したが、弥生時代早期を認めたのは、前・中・後期としていた旧版(注で早期説を紹介している)との大きな違いである。旧版では、弥生文化は弥生時代前期に成立したとする。その場合の弥生文化の指標は、水稻耕作に加えて青銅器や鉄器の「金属器」、石包丁など「大陸系磨製石器」と「機織具」があげられる。しかし、早期にはすでに水田、木製農具、大陸系磨製石器、機織具、環濠集落、戦争による殺傷人骨など、弥生文化の要素が取り揃えられている。

早期の弥生文化がおよぶ範囲は北部九州に限られるので、西日本一帯に広がる前期の遠賀川文化の成立をもって弥生時代とすべきだともされるが、最古の前方後円墳である箸墓古墳が出現する時期には、まだ大半の地域は墳丘墓・方形周溝墓が支

配的だったのと同じ理屈で、弥生文化の要素が揃う弥生時代早期を時代区分の画期として重視した。

一方、鉄器は弥生時代前期末ないし中期初頭までその出現が遅れるため〔春成2003〕、記述を改めた。青銅器でもっとも古いのは弥生時代前期であり、さらに前期終末以前の出土数は少ない。したがって、金属器は弥生文化を通じた指標にはならない。弥生時代の前半は基本的に石器時代であり、弥生時代は初期を除けばその大半の時期は鉄器をもっているため、弥生時代全体が鉄器時代であるとの理解は困難である。この改訂も、<sup>14</sup>C年代測定とその研究にもとづく。

そのほかのおもな変更点は、近年の中国東部、東北部の研究によって日本列島への稲作伝来について山東半島経由説が有力になった〔宮本2009〕ので、地図「稲作の伝来ルート」を割愛して注で示した点、弥生時代には湿田や乾田はないとする説〔田崎1989〕を重視して、半乾田など土地条件の違いに応じた営農形態の多様な展開を加えた点、銅鐸や土器の絵画の分析から、シカと鳥の信仰が農耕を背景にするという踏み込んだ解釈〔春成1991、金関1982〕を紹介した点などである。また、弥生時代中期の共通の青銅祭器を用いた地域圏の地図の復活を望む声が現場から強いのに鑑みて、新しい情報にもとづいて復活させた(教科書p.16「青銅製祭器の分布」)。

以上が、筆者が執筆を担当した箇所のおもな変更点である。

「日本史探究」がはじまり、これまでの授業とかわってくる点も出てくるだろう。教科書も、問いが設けられたり、生徒がみずから考えるための工夫がほどこされたりと、変化が大きく、一抹の不安を覚えるかもしれない。しかし、山川出版社の『詳説日本史』(日探705)、『高校日本史』(日探706)は、その大きな特徴として、ともに「信頼できる記述である」ということに、旧版とかわりはない。この2つの教科書が、学校現場で日本史を探究するための材料となることを願い、結びとしたい。

#### 主要参考文献

- 金関恕「神を招く鳥」(『考古学論考——小林行雄博士古稀記念論文集』p.281~303、平凡社、1982年)  
國木田大・佐々木由香・小笠原善範・設楽博己「青森県八戸市八幡遺跡出土炭化穀物の年代をめぐって」(『日本考古学』52、p.59~73、2021年)  
設楽博己『縄文vs.弥生——前史時代を九つの視点で比較する』(ちくま新書1624、筑摩書房、2022年)  
田崎博之「地形と土地と水田」(『古代史復元』4、p.56~67、講談社、1989年)  
谷口康浩『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』(同成社、2017年)  
谷口康浩『入門 縄文時代の考古学』(同成社、2019年)  
春成秀爾「角のない鹿——弥生時代の農耕儀礼」(『日本における初期弥生文化の成立——横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ』p.442~481、横山浩一先生退官記念事業会、1991年)  
春成秀爾「弥生早・前期の鉄器問題」(『考古学研究』50-3、p.11~17、2003年)  
宮本一夫『農耕の起源を探る——イネの来た道』(歴史文化ライブラリー276、吉川弘文館、2009年)

(したら・ひろみ／東京大学名誉教授)